

高齢者に対する災害時の行動と心理に関するアンケート調査結果

Study of the Aged People's Behavior and Psychology at Emergency

染 谷 茂 美*
 島 津 幸 廣**
 飯 田 稔***
 野 口 尚 子**

概 要

高齢者のおかれている環境と防災意識に焦点をあて、高齢者の立場に立った防災教育・訓練や防災機器の改善策等に反映させることを目的として、アンケート調査を実施した。

主な結果については次のとおりである。

- 1 「あやうく火災になりそうになった」経験者は半数以上いる
- 2 日中、高齢者は1人であることが多い
- 3 防災訓練は、防災意識を高める
- 4 防災訓練は、防災行動力や災害への備えを向上させる
- 5 防災訓練は、防災リーダーを育成する
- 6 女性の訓練未参加者が多い
- 7 年齢が上がるにつれて訓練の参加者は減っていく
- 8 居住年数が短い人や共同住宅居住者の訓練参加率が低い
- 9 「消火器が重い」「レバーが硬い」等の理由で、「消火器が使えない」あるいは「使用に支障があった」とする人が多い
- 10 高齢者は疲れやすい

In order to seize the elderly's fire protection awareness and behaviors and to reflect them on the review of fire drills and the improvement of training equipment, the Tokyo Fire Department conducted the survey by distributing the questionnaires to 266 aged people who were 65 years old or more and took part in the disaster drills, 233 aged people whom fire fighters visited and 36 burnt-out aged people who experienced fires.

The findings and proposals from the survey were as follows:

1 Findings

- (1) The aged live in the high fire potential environment.
- (2) The disaster drills bring the aged many advantages.
- (3) The conventional disaster drills are required to improve for promoting elderly people's participation.

2 Proposals

- (1) Promote the aged people's self-help effort for firesafety.
- (2) Extend the target groups to new residents and women.
- (3) Conduct the disaster drill which is friendly to the aged people's physical strength.
- (4) Expect the aged to play the role of firesafety communicator in the neighbourhood community.
- (5) Develop a training-use fire extinguisher which is lighter in weight and easier to operate.

1 はじめに

*第一研究室 **第四研究室 ***石神井消防署

当庁管内では、自損行為を除く火災による65歳以上の死者は、平成5年中で37人、平成6年中で47人と増加傾向にあり、高齢者の火災による死者の低減を図ることが

重要な課題となっている。また、兵庫県南部地震では多くの高齢者が犠牲となったが、その発生が懸念されている東京直下型地震による高齢者の防災対策も緊急の課題である。

このため、高齢者の防災対策推進の一環としてアンケート調査を実施した。その目的は避難の困難性を含めて、高齢者の災害に対する行動と意識をさらに明確に把握し、高齢者に合わせた防災教育指導方策や高齢者の立場に立った防災訓練のあり方、防災機器の改善等へ反映させることである。

2 調査方法等

(1) 調査対象グループ

ア 防災訓練に参加した高齢者(以下、「訓練参加高齢者」という)

266人(男性 130人 女性 136人)

イ 出火に係わる行為を行った高齢者(以下、「り災高齢者」という)

36人(男性 14人 女性 22人)

ウ 前ア、イ以外の高齢者(以下、「一般高齢者」という)

233人(男性 63人 女性 170人)

平均年齢 72.6歳、平均居住年数 33.6年

(2) 調査期間

ア 訓練参加・一般高齢者

平成6年8月15日から平成6年11月15日まで

イ り災高齢者

平成6年8月15日から平成7年1月15日まで

(3) 調査方法

消防職員による質問方式

(4) 分析方法

単純集計、クロス集計及びカイ二乗検定による有意差検定

(5) 対象者抽出方法

無作為抽出

3 調査結果

(1) 高齢者をめぐる火災危険

ア 「あやうく火災になりそうになった」経験者は半数以上いる。

「今までに次のような経験(図2参照)がありますか?」という質問に対する複数回答では、全体で半数以上の人が何らかの経験をしている。

「あやうく火災になりそうになった」と回答した人は、複数の項目にわたり回答している。

「やかんやなべを空だきした」、「揚げ物用の油の入ったなべを火にかけたままその場を離れた」は、その場を離れることに共通な起因があり、さらに注意の喚起を進める必要がある。

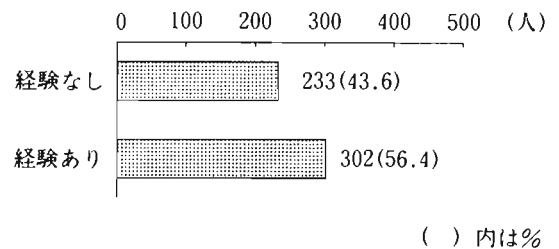


図1 あやうく火災になりそうになった経験

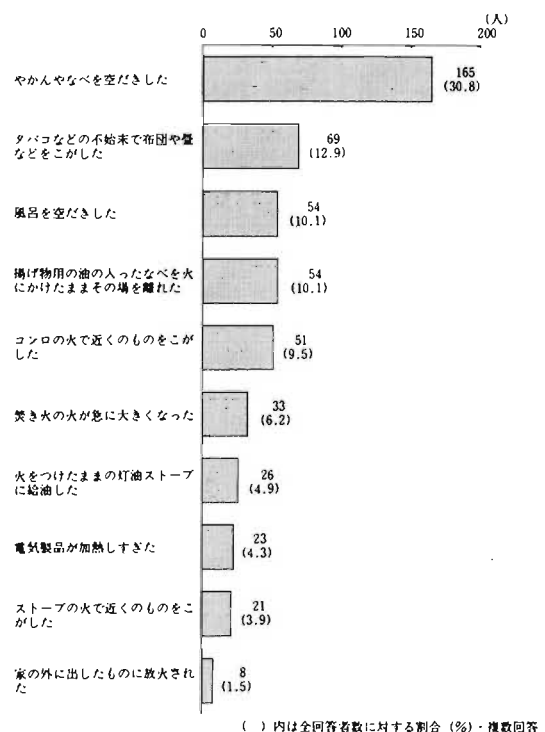


図2 あやうく火災になりそうになった経験の内訳

回答者区分別にみると、り災高齢者が他の回答者より、過去にうっかり火災を出しそうになった経験が多いとは言えない。過去にあやうく火災になりそうになった経験についての質問の選択肢のうち、1つ以上に回答した人の数は一般高齢者で233人中110人(47.2%)、訓練参加高齢者で266人中172人(64.7%)、り災高齢者で36人中20人(55.5%)であった。また、過去の防災訓練参加回数と過去にうっかり火災を出しそうになった経験の有無との間にも統計上有為な差は見られなかった。

うっかり火災を出しそうになる危険性は誰にでもあると言えるので、住宅防火診断等の機会をとらえて指導していくことが望ましいと思われる。

表1 あやうく火災になりそうになった経験

	(人)			
	一般高齢者 233人中 110人回答	訓練参加者 266人中 172人回答	り災高齢者 36人中 20人回答	合 計 535人中 302人回答
やかんやなべを空だきました	71 (30.5)	86 (32.3)	8 (22.2)	165 (30.8)
風呂を空だきました	16 (6.9)	38 (14.3)	0 (0)	54 (10.1)
揚げ物用の油の入ったなべを火にかけたままその場を離れた	15 (6.4)	35 (13.2)	4 (11.1)	54 (10.1)
コンロの火で近くのをこがした	23 (9.9)	27 (10.2)	1 (2.8)	51 (9.5)
タバコなどの不始末で布団や畳などをこがした	19 (8.2)	45 (19.3)	5 (13.9)	69 (12.9)
火をつけたままの灯油ストーブに給油した	9 (3.9)	17 (7.3)	0 (0)	26 (4.9)
ストーブの火で近くのをこがした	6 (2.6)	15 (6.4)	0 (0)	21 (3.9)
焚き火の火が急に大きくなった	5 (2.1)	25 (10.7)	3 (8.3)	33 (6.2)
電気製品が加熱しすぎた	6 (2.6)	17 (7.3)	0 (0)	23 (4.3)
家の外に出したものに放火された	3 (1.3)	4 (1.7)	1 (2.8)	8 (1.5)

()内は同一区分内の全回答者数に対する割合(%)・複数回答

イ り災高齢者の避難、負傷の状況

り災高齢者の避難の状況については、36名中17名が避難の必要がなかったため避難行動を行っていない。

避難行動を行った19名の行動内容については、次表のとおりである。(その他は「消防隊員に避難するよう指示されて避難した」など)

表2 避難状況の内容

	(人)			
	戸建	共住	他	合計
1 自分の力で逃げられた	11	2	1	14
2 近所の人に助けられて逃げられた	3	0	0	3
3 その他	1	1	1	3

19人中・複数回答

また、避難時に負傷した者は5名で、その理由は「火を消そうとしたから」(1名)、「火災に気付くのが遅かったから」(1名)、「早く歩いたり、走ったりできなかったから」(1名)、「あわててしまったので」(1名)、「その他(「火災を確認しに行つて炎にあおられた」「着衣着火し熱傷」)」(各1名)であった(複数回答)。

ウ 避難の可能性

火災が発生した場合、普段生活している部屋からけがをせず避難できると思っているかについて、一般高齢者と訓練参加高齢者499名に質問した。

避難できると思っている人は、全体では448名(89.8%)、一般高齢者のみでは203名(87.1%)、訓練参加高齢者のみでは245名(92.1%)であった。一般高齢者と訓練参加高齢者との間に、統計上有為な差は見られなかった。

表3でみると、避難できる理由として、一般高齢者では多いものから①「自分の力で逃げられるから」(182名)、②「いざというときの心構えができているから」(71名)、③「近所の人といざというときの話し合いができているから」(30名)という順であった。

訓練参加高齢者では、多いものから①「自分の力で逃げられるから」(205名)、②「いざというときの心構えができているから」(101名)、③「家族との間でいざというときの話し合いができているから」(95名)という順であった。

避難できる理由の内訳について、一般高齢者と訓練参加高齢者との間に統計上有意な差が見られ(p<.01)、いざという時の心構えや家族との間で話し合いがなされていることについて訓練参加高齢者の方が高い割合を示している。また、表4に示すように、訓練経験者と未経験者の間にも同様の傾向が見られた(p<.05)。

表3 自分が普段生活している部屋からけがをせず避難できると思う理由(回答者区別)

	(人)		
	一般高齢者 (203人中)	訓練参加者 (245人中)	合 計 (448人中)
自分の力で逃げられるから	182 (89.7)	205 (83.7)	387 (86.4)
いざというときの心構えができているから	71 (35.0)	101 (41.2)	172 (38.4)
近所の家の人といざというときの話し合いができているから	30 (14.8)	39 (15.9)	69 (15.4)
家族との間でいざというときの話し合いができているから	28 (13.8)	95 (38.8)	123 (27.5)
その他	0 (0)	3 (1.2)	3 (0.7)

()内は同一区分内の回答者数に対する割合(%)・複数回答

表4 自分が普段生活している部屋からけがをせず避難できると思う理由(訓練経験別)

	訓練未経験者 (81人中)	訓練経験者 (367人中)	合計 (448人中)
自分の力で逃げられるから	76 (93.8)	311 (84.7)	387 (86.4)
いざというときの心構えができているから	34 (42.0)	138 (37.6)	172 (38.4)
近所の家の人といざというときの話し合いが できているから	13 (16.0)	56 (15.3)	69 (15.4)
家族との間でいざというときの話し合いが できているから	4 (4.9)	119 (32.4)	123 (27.5)
その他	0 (0)	3 (0.8)	3 (0.7)

()内は同一区分内の回答者数に対する割合(%)・複数回答

避難できないと思う理由として、全体では多いものから①「早く歩いたり走ったりすることができないので」(29名)、②「気付くのが遅くなりがちだと思うから」(21名)、③「その他」(8名)であった。

一般高齢者だけでみると、多いものから①「早く歩いたり走ったりすることができないので」(20名)、②「気付くのがとかく遅くなりがちだと思うから」(13名)、③「その他」(4名)であった。

訓練参加高齢者だけでみると、多いものから①「早く歩いたり走ったりすることができないので」(9名)、②「気付くのがとかく遅くなりがちだと思うから」(8名)、③「その他」(4名)であった。避難できない理由の内訳について、一般高齢者と訓練参加高齢者との間に統計上有意な差は見られなかった。

表5 普段生活している部屋からけがをせず避難できないと思う理由(一般高齢者・訓練参加高齢者)

	(人)
1 早く歩いたり、走ったりすることができないので	29
2 気付くのがとかく遅くなりがちだと思うから	21
3 家族との間でいざというときの話し合いができていないから	2
4 その他	8

51人中・複数回答

平成5年度に第四研究室で行った、「住宅火災遭遇時の行動心理に関するアンケート調査結果」では、火災の覚知理由として65歳以上の人が多かったものは、「煙」と「物音」で、他の年代や理由との間に有意差はなかった。これらのことから、火災を知る手がかりは、視覚と聴覚に頼るところが大きいと推測

されるが、それらの機能が低下する高齢者は、火災の覚知や避難開始時期が遅れる危険性が大きいと言える。

感覚器ごとの衰えだけでなく、刺激を捉えることができても、それを正しく認知し、適切に判断する機能についても多くの問題点が指摘されている。¹⁾⁴⁾

また、平成6年中の東京消防庁管内の火災の概要によると、高齢者の死者の53.2%が一人暮らし、あるいは出火時に一人で居たため犠牲になっている。

これらのことから、高齢者は防災について日頃から自助努力するとともに、火災発生時には家族や近隣住民ができるだけ早期に高齢者に火災の発生を知らせ、避難誘導を行うこと、また、住宅用煙感知器やスプリンクラーの設置を促進し、火災の発見や消火をできるだけ早期に行えるようにすることが望ましいと思われる。

また、今回の回答者の中で、高層階居住者特有のものと思われる回答がいくつか見られた。普段住んでいる部屋から「けがをせず逃げられない」、と回答した人の理由で、「その他」に○をつけ、「高層階に住んでいるから」と回答した者が3名いた。

それ以外の理由では、「恐怖で足がすくむと思う」(一戸建て・65歳・女・過去3回以上、過去1年以内に1回訓練に参加している)(共同住宅・70歳・女・過去3回以上、過去1年以内に1回訓練に参加している)、「階段が急だから」(一戸建て・87歳・男・過去3回以上、過去1年以内に1回訓練に参加している)、「2階で1人で就寝しているから」(一戸建て・65歳・女・過去1回訓練に参加している)であった。エ 住宅地では、日中、高齢者は一人であることが多い。

「あなた自身のことについてお聞きます。あてはまるものに○をつけてください。」という質問に対して、535名中218名が「昼間、家に一人であることが多い」、184名が「昼間、自分の他に65歳以上の人がいる」、283名が「昼間、近所に65歳以上の人がいる」と回答しており、昼間、住宅には仕事や学校に行かない高齢者だけが残され、災害が発生したとしても家族や近隣者の初期対応は期待できないと思われる。また、65名が「昼間、近所に人が少なく、いざというとき不安だ」と回答している。このことは、防災について高齢者自身での日頃の備え、自助努力が必要なことを示唆するものである。「防災は生涯現役」のつもりで高齢者一人ひとりが災害に備えておく必要がある。

また、535名中58名が「誰かに時々家に来て話し相手になってほしい」と回答している。同居家族の有

無でみても、「あり」で371名中24名、「なし」で164名中34名となっており、同居家族があっても話し相手を欲している人もいることがうかがわれる。

表6 日中の生活環境

	一般高齢者 233人中 210人回答	訓練参加者 266人中 248人回答	り災高齢者 36人中 34人回答	合計 535人中 492人回答
昼間、防災上特に不安を感じたことはない	69 (29.6)	76 (28.6)	10 (27.8)	155 (28.8)
昼間、家に一人でいることが多い	116 (49.8)	85 (32.0)	17 (47.2)	218 (40.7)
昼間、家にあなたのほかに65歳以上の人がいる	63 (27.0)	113 (42.5)	8 (22.2)	184 (34.4)
昼間、近所に65歳以上の人がいる	116 (49.8)	152 (57.1)	15 (41.7)	283 (52.9)
昼間、近所に人が少なく、いざというとき不安だ	29 (12.4)	33 (12.4)	3 (8.3)	65 (12.1)
誰かに時々家に来て話し相手になってほしい	34 (14.6)	21 (7.9)	3 (8.3)	58 (10.8)

() 内は同一区分内の回答者数に対する割合 (%)・複数回答

なお、「昼間、家に一人でいることが多い」と回答した人で、最近一年間に防災訓練に参加した人は約2人に1人と、比較的少ない。

最近1年間の防災訓練参加回数
□ 0回 ■ 1回以上

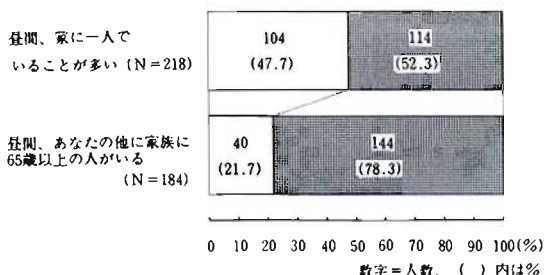


図3 日中の生活環境と最近1年間の防災訓練参加状況

(2) 高齢者に対して防災訓練を行うことの必要性

ア 防災訓練は、防災意識(知識、情報量)を高める。

「本当は、できれば防災訓練には出たくないと思いますか」という質問に対して、一般高齢者・訓練参加高齢者499人の集計結果では、「本当は訓練には参加したくない」という人は127人(25.5%)いる。その内訳をみると、一般高齢者では91人(39.1%)、訓練参加高齢者では36人(13.5%)である。訓練参加高齢者の方が本当は訓練には参加したくないという人の比率が低く、一般高齢者に比較して防災意識が高いことを示している。

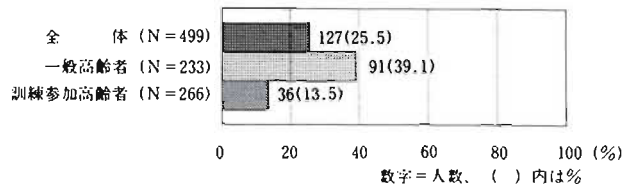


図4 「本当は訓練に参加したくない」と回答した人の割合

「ねまきや布団には、燃えにくい『防災製品』のものが市販されています。『防災製品』があることを知っていますか。」という質問に対して、「知っている」と回答した人は、499人中309人(61.9%)、一般高齢者では233人中127人(54.5%)、訓練参加高齢者では266人中182人(68.4%)であり、訓練参加高齢者の方が知っている人の比率が高く、防災意識が高いことがうかがわれる。

これらのことから、防災訓練参加高齢者は防災意識が高く、情報量も多いことがわかる。

知っている ■■■■ 知らない □

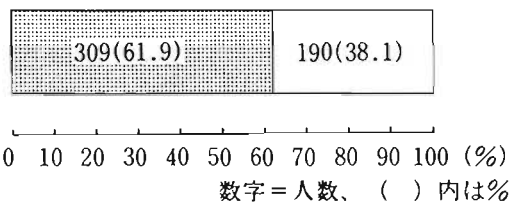


図5 防災製品の周知度

知っている ■■■■ 知らない □

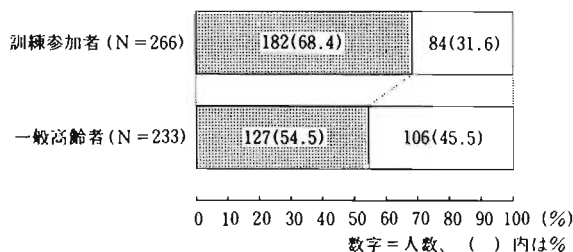


図6 防災製品の周知度(回答者区分別)

イ 防災訓練は、防災行動力や災害への備えを向上させる。

「いざというとき消火器の操作はできますか」という質問に対して、訓練参加高齢者と一般高齢者とで比較すると、訓練参加高齢者の方が「いざというとき消火器の操作ができる」と回答している人が多い。

表7 いざというときの消火器操作の自信の有無

(人)

		操作できる	操作できない	合計
訓練参加高齢者		213 (80.1)	53 (19.9)	266 (100.0)
一般高齢者		130 (55.8)	103 (44.2)	233 (100.0)
合計		343 (68.7)	156 (31.3)	499 (100.0)

()内は%

最近1年以内に1回以上消火訓練に参加した人の場合、最近1年間に防災訓練(消火訓練以外も含む)に参加した回数が多いほど、いざという時消火器を使えると回答する傾向が認められる。

表8 最近1年間に消火訓練に参加した人の消火器操作の自信の有無

(人)

		操作できる	操作できない	合計
最近1年間の訓練参加回数	1回	95 (77.9)	27 (22.1)	122 (100.0)
	2回	92 (80.7)	22 (19.3)	114 (100.0)
	3回以上	36 (87.8)	5 (12.2)	41 (100.0)
	合計	223 (80.5)	54 (19.5)	277 (100.0)

()内は%

最近1年以内に消火訓練を1回以上行い、なおかつ防災訓練(消火訓練以外の訓練も含む)に参加した回数が多い人の方が、いざという時消火器を使えないと思う理由の中で、精神的な理由として「気が動転してできない」をあげる割合が訓練参加回数の増加とともに減少している。複数回防災訓練に参加するということが、普段からの心構えにも影響を及ぼしているものと推測される。

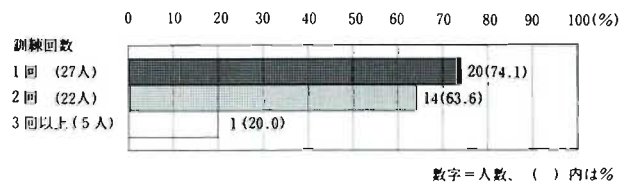


図7 最近1年以内に消火訓練に参加した人が、いざというとき消火器を使えないと思う理由として「気が動転してできないと思う」をあげた割合(最近1年以内の防災訓練参加回数別)

さらに、過去の消火器の使用体験と、いざというときに消火器を使える自信の有無について調査した。

一般高齢者・訓練参加高齢者のみの集計結果では、消火器を使ったことがある人は369人(73.9%)、使ったことのない人は130人(27.1%)であった。使用経験の有無といざというときの消火器の操作の可否の間には統計上有意な差が見られた。消火器の使用経験のある人の方が、いざというときに消火器を操作できると答える人が多い。

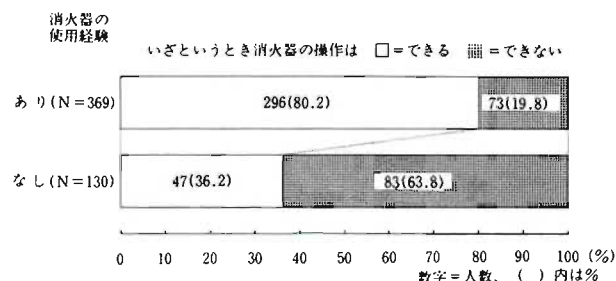


図8 消火器の使用経験の有無といざというときの消火器操作の自信の有無

ウ 防災訓練は、防災リーダーを育成する。

一般高齢者と訓練参加高齢者499人に対する、「今までの自分の災害に遭った経験を生かせることをしてみたい」とかという質問では、「してみたい」と回答している人は、全体で60人(12.0%)、一般高齢者で19人(8.2%)、訓練参加高齢者で41人(15.4%)であった。

前記ア、イも含め防災訓練は、防災リーダーの育成にも役立つといえる。

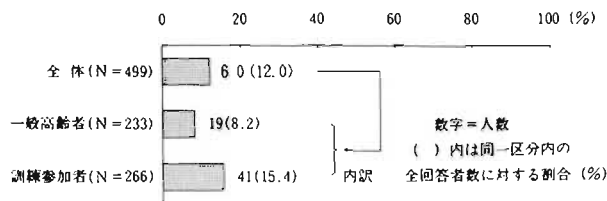


図9 質問「今までの自分の災害に遭った経験を生かせることをしてみたい」に対する回答者の割合 (回答者区分別)

空襲、大地震などの被災体験の有無で見ると、有の人では、48人(15.2%)、無の人では、12人(6.6%)が「今までの自分の災害に遭った経験を生かせることをしてみたい」と回答している。体力を必要とする活動は別にしても、今までの被災体験や人生経験を生かし、日頃から地域住民のまとめ役や助言者として高齢者を活用することは可能と思われる。世間話の中に防災の話題を提供し、動機付けの役割もする地域の防災コミュニケーターとしての活用方策も有効であると思われる。

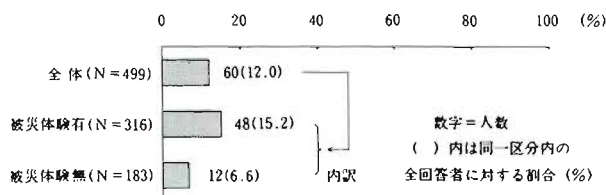


図10 質問「今までの自分の災害に遭った経験を生かせることをしてみたい」に対する回答者の割合 (被災体験の有無別)

(3) 防災訓練の実態・問題点

ア 女性に訓練未参加者が多い。

高齢者の防災訓練への参加状況について性別で見ると、過去の訓練参加回数と性別との間に統計上有意味な差が見られ、一般高齢者で見ると未参加は女性の方が多。また、訓練参加高齢者で見ると3回以上参加は男性の方が多く、繰り返し防災訓練を体験しているのは男性の方が多いといえる。

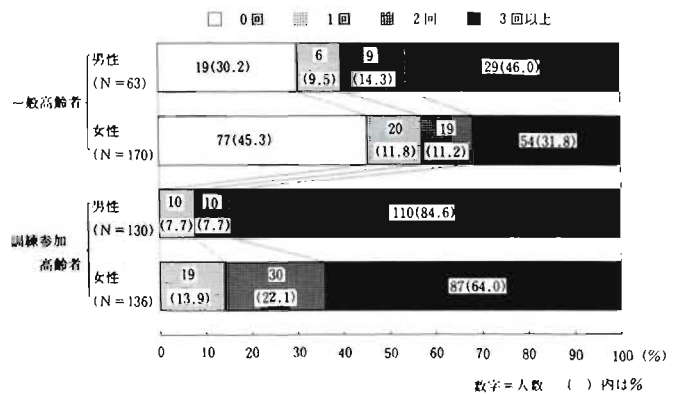


図11 性別と過去の訓練参加回数

イ 年齢が上がるにつれて訓練の参加者は減って行く。一般高齢者の過去1年間の訓練参加回数を年齢別に見ると、年齢が上がるにつれて訓練経験及び最近1年以内の複数回訓練参加者数は減っていく。

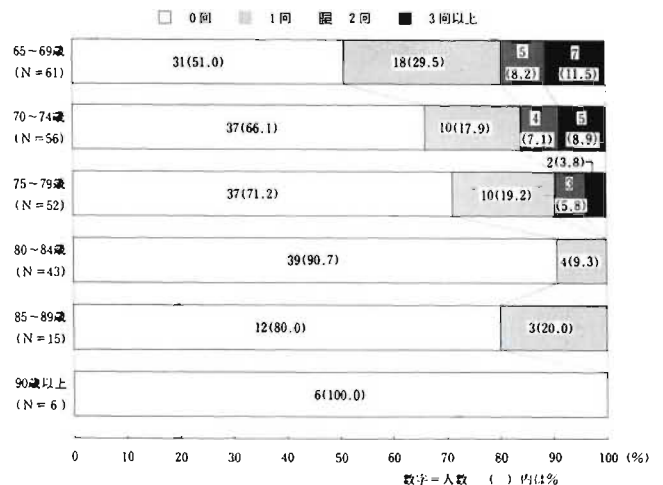


図12 年齢と最近1年間の訓練参加回数(一般高齢者)

居住年数別で見ると、居住年数が短い人の方が訓練参加率が低い。

住居の形態別で見ると、共同住宅居住者の方が訓練参加率が低い。

以上のことから、管内特性で共同住宅が多い地域や居住年数が比較的短い居住者で構成されている地域では、住民に積極的に呼びかけるなどして重点的に広報と訓練の推進を図る必要があると思われる。

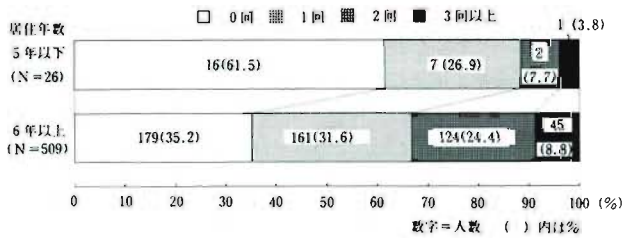


図13 居住年数と最近1年間の訓練参加回数

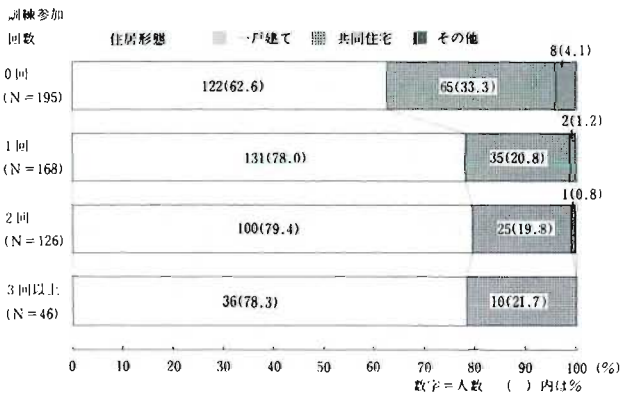


図14 住居形態と最近1年間の訓練参加回数

は20kgf以下で作動することとなっている。

高齢者の握力は、70歳の場合、男性で約35kg、女性で約20kg、である⁵⁾。普段の生活に支障がなく、健康な状態ならば、現行の消火器の使用にも支障がないものと思われるが、高齢者の体力・知力は若年者よりも個人差が拡大することが知られており⁴⁾、個人個人の握力は平均値を中心にかなりばらつきがあると思われる。

以上のことを踏まえ、今回の調査結果からも、「消火器が重くて持ち運びづらかった」、「消火器のレバーが硬くて握るのが大変だった」などの感想があることから、小型、軽量で扱いやすい消火器の開発が望まれる。

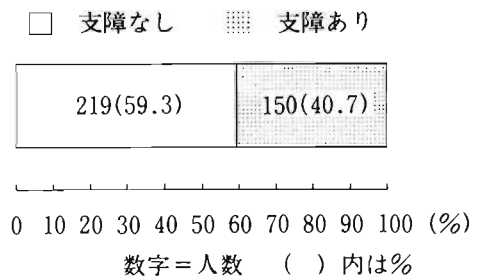


図15 消火器の使用に支障のある人の割合

ウ 「消火器が重い」、「レバーが硬い」等の理由で、「消火器が使えない」、あるいは「使用に支障があった」とする人が多い。

訓練または実際の火災で消火器を使ったことがある人369人中、219人(59.3%)が「支障なく使えた」と回答し、150人(40.7%)が「支障あった」と回答している。

「支障あった」と回答した150人のうち79人は、消火器を使った感想で「消火器が重くて運びづらかった」を、71人が「あわててしまった」を、42人が「消火器のレバーが硬くて握るのが大変だった」をあげている(複数回答)。

り災高齢者の中で、今回の火災時に消火器を使用した者は2人いた。その使用感想は、「消火器が重くて持ち運びづらかった」(78歳、女、過去に3回以上、最近1年以内にも1回訓練に参加している)、「いざというとき使い方を忘れた」(68歳、女、訓練経験なし、被災経験なし)であった。

消火器の重さは、一般的な10型ABC粉末消火器で、約6kgである。また、レバーを握るのに必要な握力は、車載式のものにあつては40kgf以下、住宅用のものにあつては10kgf以下、その他のものにあつて

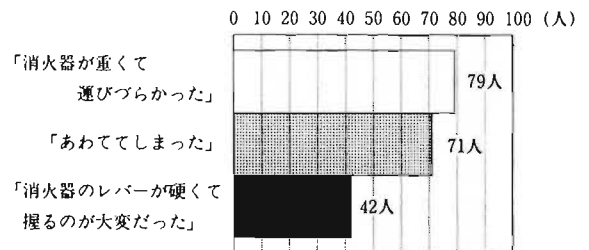


図16 消火器を使って支障のあった150人の理由(複数回答)

エ 高齢者は疲れやすい。

訓練参加高齢者266人に対する、「今日の訓練のことについてお聞きます。」という質問に対して、①「休憩する場所があればよかった」(66人)、②「日差しが強かったので、もっと涼しい時期にしてほしい」(55人)、③「大きな声でゆっくり説明してほしい」(37人)(複数回答)等の回答が多かった。

調査期間が8月15日から11月15日であり、昨夏の猛暑も原因の一端となっていると考えられるが、疲

労や体力の消耗に配慮が必要であり、訓練の流れをよくし、短時間で終了するように配慮する、むだな時間と思わせないようにするなど効率よく訓練を実施することが必要である。また、訓練の実施時期についても比較的しのぎやすい時期や時間帯に計画するなどの対策が必要と思われる。

表9 調査当日の防災訓練の感想（訓練参加高齢者）
(人)

1	休息する場所があればよかった	66
2	日差しが強かったので、もっと涼しい時期にしてほしい	55
3	もっと大きな声でゆっくり説明してほしい	37
4	会場が遠いので、家の近所でしてほしい	18
5	消火器などの使い方の説明では、図や文字が小さくてよく見えなかった	16
6	会場の足場が悪かった	3
7	その他	14

複数回答

図4にも示したが、「本当は、できれば防災訓練には出たくないと思いませんか」という質問に対して、一般高齢者・訓練参加高齢者のみの集計結果では、「本当は訓練には参加したくない」という人は127人(25.5%)いる。

訓練経験の有無では、本当は防災訓練に出たくないという質問に対する回答と、その理由の内訳について統計上有意な差が見られ(p<.01)、どちらも「疲れるから」が最も多い理由になっているが、訓練経験者では「何回も出ているのもういいと思うから」「近所づきあい出ているだけだから」が、訓練未経験者では「その他」「他に用事があるから」がその次に多い理由になっている。訓練経験者と未経験者で防災訓練に出たくない理由に違いがあり、その点を考慮した上で、訓練未経験者には参加する興味を引くような、訓練経験者には参加が無意味ではないと思わせるような配慮が必要と思われる。

表10 防災訓練に参加することの本音

(人)

	本当は防災訓練に出たくないと思いませんか		
	は	いいえ	合計
訓練経験者	73 (18.1)	330 (81.9)	403 (100.0)
訓練未経験者	54 (56.3)	42 (43.8)	96 (100.0)
合計	127 (25.5)	372 (74.5)	499 (100.0)

()内は%

表11 本当は防災訓練に出たくない理由(訓練経験者)

(人)

1	疲れるから	29
2	何回も出ているのもういいと思う	23
3	近所づきあい出ているだけだから	16
4	他に用事があるから	6
5	わかりにくいから	2
6	その他	14

73人中・複数回答

表12 本当は防災訓練に出たくない理由(訓練未経験者)

(人)

1	疲れるから	31
2	他に用事があるから	11
3	わかりにくいから	4
4	近所づきあい出ているだけだから	3
5	その他	12

54人中・複数回答

表13 本当は訓練に出たくない理由(年齢別)

(人)

	65~69 歳(29 人中)	70~74 歳(33 人中)	75~79 歳(27 人中)	80~84 歳(25 人中)	85~89 歳(8 人中)	90歳以上 (5 人中)	合計
疲れるから	12 (41.4)	15 (45.5)	12 (44.4)	15 (60.0)	4 (50.0)	2 (40.0)	60 (47.2)
何回も出ているのもういいと思う	11 (37.9)	6 (18.2)	4 (14.8)	2 (8.0)	0 (0)	0 (0)	23 (18.1)
近所づきあい出ているだけだから	9 (31.0)	3 (9.1)	4 (14.8)	2 (8.0)	0 (0)	1 (20.0)	19 (15.0)
他に用事があるから	8 (27.6)	4 (12.1)	1 (3.7)	3 (12.0)	1 (12.5)	0 (0)	17 (13.4)
わかりにくいから	1 (3.4)	2 (6.1)	0 (0)	3 (12.0)	0 (0)	0 (0)	6 (4.7)
その他	1 (3.4)	6 (18.2)	8 (29.6)	5 (20.0)	4 (50.0)	2 (40.0)	26 (20.5)

127人・複数回答

4 まとめ

厚生省人口問題研究所が発表した「日本の将来推計人口」(92年9月推計)の中位推計によれば、日本は急速に高齢化社会が進み、2025年には約3.8人に1人が65歳以上の高齢者になるとされており、行政は社会の高齢化に伴う種々の問題について取り組んでいるところである。

当庁においても、“消防のふれあいネットワーク”地域協力体制づくりの推進、住宅防火対策の推進、緊急通報システム等の整備など高齢者の安全対策が進められている。

第四研究室では、「住宅火災遭遇時の行動心理に関する研究」や「避難行動に関する研究」において、高齢者は火災時に冷静さを失いやすいことや身体的機能の衰えなどから防災行動力が低下することなどを明らかにし、避難誘導に関するものをはじめ種々の提言を行ってきた。

今回の調査ではさらに、高齢者のおかれている環境と防災意識に焦点をあて、高齢者の立場に立った防災教育・訓練や防災機器の改善策等に反映させることを目的とした。

当庁管内では、自損行為を除く火災による死者は、平成5年中で37人、平成6年中で47人と増加傾向にあり、高齢化社会の進展を踏まえると、今後もさらに犠牲者の増加が懸念されている。

また、兵庫県南部地震では、火災が多発し、「自分の家から火を出さない、わが町は自分達で守る」ことの必要性をあらためて認識したところである。

こうした状況を踏まえ、調査結果から以下のことを更に検討していく必要がある。

5 調査結果からみた考察

(1) 高齢者の防災自助努力を促す

日中一人でいる高齢者が多く、しかも防災訓練の参加率が比較的低いこと及びあやうく火災になりそうになった高齢者が半数以上いることは、災害が発生した場合高齢者は当初、自分一人に対応せざるを得ないことを意味する。このため、高齢者に対しては『防災は生涯現役』の意気込みで各種防災行事に参加することを促し、高齢者の防災意識・防災行動力のレベル維持を図る必要がある。

(2) 防災訓練対象者の多様化を図る

高齢者のうちでも女性の訓練参加者の割合が人口割合に比べ低いことや居住年数が短いほど、さらに共同住宅居住者に防災訓練参加者が少ないことから防災訓練対象を従来の町会・自治会の自主防災組織の確立と充実に加えて、新築のマンション、生涯学習グループや趣味の会に広げるなど、女性や居住年数の少ない人の参加を促進する必要がある。

(3) 高齢者の体力に配慮した防災訓練を行う

高齢者は疲れやすく、休息する場所がほしい、もっと涼しい時期に訓練をしてほしいなどの要望が多いことから、待ち時間を感じさせない能率良い訓練を比較的しのぎやすい時期・時間帯に行うなど高齢者の体力に配慮した防災訓練のあり方及び訪問等による訓練指導の実施などについて充実する必要がある。

(4) 地域の防災コミュニケーターとしての高齢者の活用を図る

訓練に参加した高齢者や空襲、震災などの被災体験のある高齢者の中には、「今までの自分の災害に遭った経験を生かせることをしてみたい」と回答している人がおり、被災体験や人生経験を生かして日頃から地域住民のまとめ役や助言者として高齢者を活用することは可能と思われる。世間話の中に防災の話題を提供し、動機付けの役割もする地域の防災コミュニケーターとしての活用方策も必要である。

(5) 高齢者の体力に配慮した訓練資器材を開発する

高齢者で消火器を実際に使用した人の40%が、その体験から、消火器が重い、消火器のレバーが硬いなどの理由で使用に支障があると回答していることから高齢者の体力に配慮した訓練資器材の開発について検討する必要がある。

参考文献

- 1 「高齢者の行動特性」 平成7年2月 徳田哲男 平成6年度火災学会講演討論会テキスト-災害弱者と避難安全-
- 2 「災害と防災環境からみる 高齢者の実態（平成5年中）」 平成6年9月 東京消防庁
- 3 「消防に関する世論調査」 平成6年11月 東京消防庁
- 4 「新版 老年心理学」 平成5年4月 井上勝也・木村周 編 朝倉書店
- 5 「日本人の体力標準値(第4版)」 平成元年9月 東京都立大学体育学研究室編 不昧堂出版